

パネル

戦前までの日本における諸宗教研究の現在の意義

代表者・司会 星野英紀
コメンテータ 関 一敏

戦前日本における中国宗教研究

菊 地 章 太

中国宗教という全体を構成するものは儒教と仏教と道教であるが、現実にはこの三教が共存しつつ時には渾然と解けあつてきた。それが中国宗教の社会的な実体である。ところがわが国では、三教が個々別々に研究されてきた。儒教は江戸時代に官学であつたが、近代的な意味での学問研究は仏教の場合と同じく明治以後のことになる。道教は戦前にも注目されていなかったわけではないが、戦後になってようやく研究がさかんになった。道教研究こそ戦後の中国宗教研究の注目すべき成果である。それが戦前の研究とどのようにつながり、あるいはどこで断絶しているのか。断絶しているとしたらその理由は何か、ということが本報告の一つのテーマとなる。

日本における中国宗教の研究は、他の宗教研究のありようとはやや違った側面があるように思う。それは、中国宗教を研究する私たちの恐らくほとんどがそれを信仰してはいない、とい

うことにかかわっている。にもかかわらず日本人はそれをずっと研究対象にし続けてきた。そこには、中国の文化を取り入れながら私たちは自国の文化を形作ってきた、という意識が大前提にある。したがって、自分たちの文化の根本を理解するために隣国の文化を学ぶという姿勢があり得ることになる。戦前はやはりそうした距離の取り方が優勢であつた。

戦後は中国をあくまで外国として捉えるようになってきた。それは中国宗教に関する戦前までの研究のありようと戦後のそれとのあいだに、はつきりと現れている。中国が日本にとって他者になったからこそかえって、戦前には顧みられることの必ずしも多くなかつた道教が、中国宗教研究のなかで注目されてきたと言える。もともと他者である欧米人のあいだでは、道教の研究は昔からたいへんさかんである。宗教を社会現象と捉えるならば、シンクレティズムにまみれた庶民の信仰こそが宗教の現実の姿であつて、道教はそのような信仰世界を支え、またそれに支えられて広まったのである。

もちろん戦前の日本でも道教がまったく無視されていたわけではない。現地調査の可能性や規模は戦前と戦後では逆転してしまつたが、戦前の現地における膨大な調査報告書には、中国の都市でも農村でも道教の神々がさかんに信仰されていることが記録されており、道教を無視して中国社会の理解は難しいという観察も、現地に長く滞在した民間の研究者によつてなされていた。ところが国内における中国宗教研究の領域では、道教へのまなざしが欠落していた。それはなぜかという問いが、戦前の中国宗教研究のありようと、そして戦後との隔たりを理解

することにつながるのではないか。

私たち日本人にとって、表層的には道教はまったくの他者であることはまちがいない。一方で、儒教は倫理規範として日本人のメンタリティーに浸透していたと、少なくとも昔はそう信じられていた。ここには実は大きな見落としがある。戦前どころか江戸時代このかた、私たちは儒教を宗教とは捉えてこなかった。社会規範や生活倫理、あるいは政治思想としての側面をもっぱら取り入れてきた。実際には先祖祭祀や葬墓制など、むしろ宗教にとつて本質に関わるものを日本人も取り入れなかったわけではない。そういう視点からの研究も最近行なわれるようになってきた。宗教としての儒教に目を向けていくことは大きな可能性として残されているだろう。これは今後の中国宗教研究の課題の一つではないかと考えられる。

戦前日本における仏教研究

下 田 正 弘

長い歴史をかかえる戦前の仏教研究を概観するさい、時代の流れに沿って時期をいくつかに画期し、その間に認められる差異の記述をなすのが一般的であろう。じつさいこの試みは近年、末木文美士（『近代日本と仏教』トランスビュー、二〇〇四年）により、東京（帝国）大学の印度哲学講座を対象として二期に区分してなされ、有益な見取り図が提供されている。ただ

こうした研究史の叙述は、未熟な古い時代を開明的な次世代が乗り越えてゆくという、直線的な進歩史観を呈しがちな点には注意がいる。研究史叙述の意義は、複層的な過去の蓄積によって成り立つ現在が胚胎する諸問題を、過去を記述し直すことによつて顕在化させ、それをおして未来を開くべき指針となす点にある。この目的のためには時系列による叙述を離れ、その時々によつて優勢となった態度を見きわめ、それによつて解決された課題と見えなくなった課題とを個々に明かしてゆくことが必要だろう。

日本の仏教学者たちにとつて全く未知であった近代仏教学を零から立ち上げた戦前七〇年の研究の成果と、その基礎に立ちつつ先行研究を批判的に深化させた戦後の七〇年の成果とを比較したとき、そこにはきわだった差異が存在する。明治維新より半世紀、西洋思想と対峙しつつ厳しい緊張関係のもとに仏教を研究対象としつづけていた戦前の学界においては、仏教の全体像を希求し、一つの精神的態度を要請する存在としてそれを描き出そうとする意欲が強かった。ところが敗戦（あるいは「民主化」）によつて欧米との対立が不要となると、仏教を一つの存在として樹立させるべき呪縛から解放され、その意欲は学界から急速に後退し、それに代わつて仏教を社会的諸要素から構成される文化現象として理解する傾向が強固となった。研究の関心は各要素の考察に個別に当てられ、それらが相互に関係し、仏教という全体をどう構成しているかという問いは、多くの場合に不問に付された。この変化にもなつて実存的、哲学的な課題を仏教において問おうとする態度は学界から